

# 【ねがいましては】

第69号

平成6年10月25日

共和珠算学習塾

「おこらんかってん」

前回の灰谷文学「チューアンガムひとつ」いかがだったでしょうか。子どものもつ母への想いが強烈ににじみでている作品でした。この詩はノンフィクションであり、灰谷さんが実際に教員をされていた時に出会ったお子さんが書かれたものです。やすこちゃんにはかないません。読み返すたびに私自身が小さく見えてしまいます。

そしてもうひとつ、読めば読むほどスルメイカのようにやさしさがにじみ出てくる詩があります。それは灰谷さんの作品「兎の眼」の中の一場面なのですが、小学校一年生の小谷（大学出たての新任の先生）学級で起こったことです。知恵遅れの女の子（みな子ちゃん）が転入してきます。みな子ちゃんはことばは少しだけ、おしつこももらしてしまいます。授業中、となりの子のノートをやぶったり、教科書をやぶったり、ふでばこを取ったり投げたりのいたずらっ子です。普通に考えればとなりにいる子は怒るか泣くか・・・。となりにいる淳一くんは、こんな詩を書きました。

ぼく  
みなこちゃんがノートやぶったけど  
おこらんかってん  
本をやぶってもおこらんかってん  
ふでばこやけしゴムとられたけど  
おこらんかってん  
おこらんと  
でんしやごっこしてあそんだってん  
おこらんかつたら  
みなこちゃんがすきになったで  
みなこちゃんがすきになったら  
めいわくかけられても  
かわいいだけ

この作品は私の授業内での行動に大きな力を与えています。と、言いつつなかなかうまくはいきません。ご家庭内でのお母さんやお父さんにも同様だと思います。

私からのお願いです。この淳一君の詩を数回読み返していただきたいのです。わがままなお願いだと思いますが、心の中が温かくなったらと思います。

先日も授業中に教室のネコが机の上に乗り、生徒のノートの上に座り込んでしまいました。彼は何も出来ずにいましたので、私が何度となくつまみ上げてはおろしましたが、また上がってしまいます。そして彼はついに行動に移りました。そーっと両手で抱えておろしてあげました。その子は優しい気持ちでそうしたのか、それとも恐怖心でいっぱいだったのかはわかりません。が、私には優しい子に映りました。

人でも小動物でも、目の前にいる「こころ」を大切にしてあげること。それは生命でなくとも同様、机、鉛筆、ふでばこ、校舎、雲、景色・・・。優しい気持ちでみつめてあげること。

見つめられるもの、見つめるもの、どちらもやさしい気持ちで溢れている瞬間です。

我が子が悪いことをした。でも、その奥底をそっとやさしく見つめてあげてください。